

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-04

特集私たちのみた世界：ヨーロッパのバス 旅行：5. 南ドイツのむら

森永, 律子

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

42

(終了ページ / End Page)

44

(発行年 / Year)

1967-03-21

ローマの現実には古いもの（例えばコロセウム、フォロ・ロマーノ、パンテオン、バチカン市国、最高裁判所等）と、新しいもの（例えば外務省、オリンピック会場、ニュー・ローマ）が混在している。特にヨーロッパ随一といわれる超近代的な Termini Station は、新旧の配置を充分に取り入れた建物である。新しい建物はアメリカ型のものが強い。それ以上に市民のスタイルはアメリカナイズされている。

水の都 Venezia を訪れたとき、幸か不幸か雨にふられ、サン・マルコ寺院とゴンドラの景観は絵の如くであつた。ここでも観光客が群がり、自動車の波と定期観光船の混雑には閉口した。寺院広場に高い塔が建ち、鳩が観光客にたかつていた。どこにでもある風景である。たゞ寺院の一角に図書館を取り囲んで書店の売店が並んでいる。この売店で目ぼしいものはないかと物色していたら、人種不明の人に「あなたは日本人か」と聞かれた。その言葉は今でも不思議なくらい耳に残っている。

巡検によるイタリアの栽培景観の例

北イタリアのアルプス山麓からロンバルディア平原にかけて養蚕業が発達している。更にこの地域は畑地の中に水田稲作が分布する。畑地と水田が同地点に存在し、その区別は用水路によつてゐる。水田稲作はポー川の水を灌漑していることがわかる。畑地も灌漑によつて小麦、ビート、トマト、ブドウ、トウモロコシを栽培する

ポローニヤからフィレンツェ・ローマ間は果樹栽培が卓越し、リンゴ、ナシ、モモ、ブドウが主である。ポローニヤからアペニンの山地や、フィレンツェ南部の丘陵地帯はオリーブが目立ち、ブドウ、トウモロコシ、牧草が間作されている。ポローニヤの北部地域は特に洋梨と桃とリンゴが中心で、ポー川の北側地域に移ると、果樹の集中栽培が漸減し普通畑と混合する。要するにイタリア北東部の果樹卓越地域はポローニヤ、ポー川流域を中心としたミラノ、フィレンツェ、ヴェネツィアを結ぶ三角形の地域である。この土地利用はアルプスに近づくに従い小規模になり、やがてアルプスの景観に没入してしまう。

都立葛飾商業高校 菊池 豊

5 . 南ドイツのむら

Augsburg を出発し、中世の面影をとどめるロマンティッシュ・シュトラッセへ向う。

この地方はアルプス前地といつて、アルプス山地とドナウ河谷との間にあたり、北方に緩やかな傾斜をもつ高原地帯である。アルプス氷河が残した東西方向の堆石列と、これに直角に伸びる湖沼との群が多く見られ、北へ向つている私達のバスは、この堆石丘を一越え二越えと横切り湖沼を左右に見ながら進む。

この地形のためだろうか、ドイツ南部にはauとかgauのついた地名が多く、これは“川や湖のほとりに柳がある所”という意味をもつそうだ。またネツカー川がライン河に注ぐ辺りにも“小さな川”という意味のbachとついた地名が多い。これもやはりその地形からだろう。

バスはDonauwörthと呼ばれる古い町で、アルプスから流れ出てきたばかりのドナウ川を渡る。まだ川幅は狭く水は濁っている。「美しき青きドナウ」というが、こちら辺のドナウの水の色は日によつて変わるそうだ。上流のアルプス地方の気候と岩石の成分に関係あるらしい。

町を一步出るとなだらかな丘陵地が広がり、整然と区画された豊かな耕地は、小麦、甜菜、牧草地などになつている。ところどころに鬱蒼とした森林が茂り、このような農村の中を進んで行くと、数Kmおきに塊村に出合う。古びた赤屋根をぎつしり並べ、一塊りに集つている姿は、何か模型でも見ているようだ。

道路のわきにはケシや矢車草が色を添え、よく見ると畑の中にも点々と咲いている。私達の目には美しく映る花も、ここでは雑草のひとつなのだろう。

道路に沿つて十字架のキリスト像が多くなつた。これはヨーロッパのどの国にも見られたが、田舎道のそれも主に分岐点にあるところなど、日本の道祖神に似ている。しかし日本のおだやかな姿ではなく、矢に刺された血みどろの姿は苦痛の様子をありありと表し、見ている私達にもその痛みや苦しみが伝つてくるようだ。なぜこんな姿を立てているのだろうか。そういえば教会や博物館で見た絵画や彫刻にしても、このような残酷な姿が多かつたことが思い出される。

まもなくNordlingenの町へはいつた。城壁に囲まれた円形に近いこの町は、真中に市場広場や教会があり、道路や広場はすべて古い石畳になつている。建物もみんな古びた急傾斜の赤屋根で、角の欠けた石柱などいたるところに中世の姿を残している。

今にも崩れ落ちそうに見えていた城壁に登ると、荒れはててはいるが立派な石造りで、内側には70~80cmの通路があり、側面には縦60cm横40cm位の穴が2~3mおきに続いている。昔、戦争の時、ここから石や煉瓦を投げて戦つたのだろう。端から端まで歩いても1Kmもないこの町が、自由都市として生きていく為には、全住民がこの城壁に立つて戦わねばならなかつただろう。

そんな事を考えたり、町の形体を見ていると、ここには当然共同意識が強まらざるを得なかつただろうと思われてきた。このことは農村や北ドイツの古い都市、中部イタリアの山上集落などからも感じたことであつた。

そしてこの事にヨーロッパの徹底した個人主義、ひいては民主思想などもつながっているように思われ、廻り歩いた先々でその生活や人柄にふれるたびに、その土地の歴史、風土がいかにか人間の生活、思想に浸み込んでいるか、はつきり見せられた思いであつた。

それから途中で見たキリスト像の残酷さ、日光浴を兼ねるだけではかたづけられない屋外での食

事など、いろいろな面でのヨーロッパと日本の違いに興味を覚え、今もなおその追憶に浸っている。

学部4年 森永律子

6. 西ドイツの印象

西ドイツの主な都市をまわってみて、どの都市についてもいえることは、一様にアメリカ型の復興をしているということである。ハンブルク、ミュンヘン、ボン、ケルン等はその好例である。しかしオ二次大戦の破壊を

免れたノルトリンゲン(中世の城郭都市)、ローテンブルグ(中世都市の代表)、ハイデルベルク(大学の町)等は往時の姿をそのまま残している。

また特に目についたことは、ビール、煙草、石油の広告とともに、西ドイツ軍とNATO軍の多いことである。これはオランダ、デンマークに見られなかつたことで、フランスではGO HOME YANKEEが街角に張り出されている程である。西ドイツは実に広い、それは新大陸の比でないだろうが、我が国から見れば大きな差異である。西ドイツの主要作物は北ドイツのビート、ライ麦、ジャガイモ、中部高原の

